

医学教育ニュース

(第 67 号)

令和 4 年 10 月 28 日 発行

編集 久留米大学医学部教務委員会 広報活動部会

◆巻頭言◆

今回の医学教育ニュースは、8月20日に行われました医学教育ワークショップの特集号となっています。最初に実行委員長を務められました井川 掌先生から、ワークショップの概要をご説明頂きました。次に当日の様子について事前アンケートを踏まえ

たグループ討議の提言を中心に掲載しています。最後に参加してくれた学生の皆さんからのアンケートを掲載しています。全ての学生の皆さんに関係する事ですので、是非ご一読ください。

「第 26 回 医学教育ワークショップが開催されました」

実行委員長／泌尿器科学 井川 掌 主任教授

先の8月20日(土)に第26回医学教育ワークショップが開催されました。この医学教育ワークショップは、昭和52年に第1回が開催され、以降およそ2年毎に久留米大学の医学教育に関する様々な課題について多くの議論を重ねてきた重要なイベントです。前回の第25回(石竹達也実行委員長)は国際基準による教育評価をテーマに平成30年に開催されましたが、その後のコロナ禍の為に延期が続き、今年実に4年ぶりの開催に至りました。近年、医学教育の課題が山積する中で今回は「クリニカル・クラークシップ」をメインテーマとして取り上げ、さらに7つのサブテーマに分け

て議論を行いました。クリニカル・クラークシップは過去に何度も取り上げられてきましたが、今回再び選んだのには理由がありました。1つはコアカリキュラムの大幅な改訂が既にかなり進んでいること、もう1つが医師法改正で Student Doctor の医行為実施が法的に認められること等々に向けての久留米大学としての対応が待たなしで求められている現状があるからでした。いずれにしてもこれらの医学教育現場への実装はもう目の前に来ています。

今回はコロナ禍の中での開催になりましたので、感染予防対策に重点を置き、できるだけ事前のメ

ールやオンラインでの議論と準備をサブテーマごとに進めていただきました。この基本となる情報として、教員と学生(5,6年生)の皆さんに Google フォームでの事前アンケートに回答いただき参考としました。当日は最終的な提言のまとめの議論を対面で1時間程度実施し、最後参加者全員(学生さん6名および一部オンライン参加者を含む)

での全体討論を行いました。限られた時間でしたが、議論の結果様々な提言を頂く事ができたこと、多くの皆さんに共通認識を持っていただけたことは収穫であったと思います。今回のプロダクトが今後の久留米大学の医学教育にスピード感をもって反映されることを期待したいと思います。皆さんのお力添えを是非よろしくお願い致します。

第26回 医学教育ワークショップ

2022年8月20日(土) 9:00~15:00

テーマ: クリニカル・クラークシップ

待ったなしのクリクラ改革

—久留米大学にふさわしい真に実効性のあるクリニカル・クラークシップとは?—

● 開会あいさつ

矢野博久 医学部長



安陪等思 教務委員長



● 今回のワークショップの流れ

井川掌 実行委員長



<第1部> 導入—共通認識を得る (9:15~10:45 1時間30分)

1. 現場からの声: 事前アンケート結果報告 井川掌 実行委員長 (15分)
2. アンケート結果から見えること 福本義弘先生・山田圭先生・本多亮博先生 (15分)

3. 基調講演 学習者評価

医教セ：柏木孝仁先生（30分）

4. 実習での取組の紹介：協同学習の活用

准講会：津田尚武先生（30分）



5. 第2部 作業開始にあたっての説明

井川掌 実行委員長・教務課（5分）

<第2部> グループ作業 11:00~12:00

【テーマ】

A. 学生としてどう臨むべきか

リーダー 小曾根基裕先生、加治建先生

サブリーダー：有永照子先生、三好寛明先生

B. 教員のやる気を引き出す方法

リーダー：深水圭先生、平岡弘二先生

サブリーダー：内山雄介先生、石橋生哉先生、藤田文彦先生

C. 基礎医学の視点から

リーダー：溝口充志先生、吉田茂生先生

サブリーダー：小松誠和先生、近藤礼一郎先生、田平陽子先生

D. 実効性のある方法の提案

リーダー 福本義弘先生 野村政壽先生、梅野博仁先生

D-1 オンライン実習の活用法

リーダー：梅野博仁先生

サブリーダー：深水亜子先生、木下正啓先生、原将人先生

D-2 協同学習を応用した実習法

リーダー：福本義弘先生

サブリーダー：津田尚武先生、力丸由起子先生

D-3 新しい手法の可能性

リーダー：野村政壽先生

サブリーダー：山田圭先生、田上秀一先生、向原圭先生

E. クリクラ評価の方法

リーダー：川口巧先生、柏木孝仁先生

サブリーダー：庄嶋賢弘先生、柴田了先生



※ランチョンセミナー 12:30～13:20

「共育～コミュニケーション能力と信頼関係を育てる～」
保健管理センター 安川秀雄先生 (50分)



第3部 全体討論 13:30～15:00

各グループからの発表・提言、質疑応答 (各10分程度)

テーマと事前アンケート結果

A. 学生としてどう臨むか

学生アンケートより

クリクラに臨むにあたって目標をたてた学生は80%
事前に各科のシラバスに目を通した学生は60%

B. 教員のやる気を引き出す方法

本項に関する教員アンケートのまとめ

- クリクラ学生指導に費やす時間は1時間未満20%、1～2時間が29%、2～4時間が23%、4～6時間が20%
- 170分では5%未満が43%、5～10%が36%、10～20%が16%
- 自己採点では25%の教員が高めの評価
- 23%の教員が負担を感じている。
- 49%の教員がクリクラ指導のモチベーションは高いと答えた。
- クリクラに臨む学生の学修準備は44%の教員が不十分と感じている。
- 34%の教員がクリクラの学生のやる気を感じていない。

グループ討議後の提言

テーマA 学生としてどう臨むべきか

提言

“学生としてどう臨みたいか”

1. 実習で学ぶことを明確にして臨む
2. いろいろ発言したり、聞いたりできるように先生たちと距離感を縮めるように励む
3. 実習で面白い、楽しかった、などモチベーションを保てる様にして臨む

“教員がすべきこと”

1. 学生がコミュニケーションをとりやすい雰囲気づくり (怒らない、ほめるなど)
2. 学生が学修しやすい環境づくり (見学だけでなく解説をする、習得すべきことを伝えるなど)

テーマB 教員のやる気を引き出す方法

提言

1. 協同学習を取り入れることにより教員の負担を軽減し、さらなる学生のレベルアップを実感する。
2. 学生が講座単位で教育について評価し、トップ3～5位の講座を表彰する
3. 評価が高い講座の教育システムを公表し、学生評価と講座入局数との関連を検討する
4. 各講座でFacultyとキャリアミーティングを行う
5. 定期的な学生アンケートにより教員が学生の成長を実感し、学生による評価を教員にフィードバックするシステムを構築する。



C. 基礎医学の視点から

学生アンケートから

56%の学生がクリクラで基礎医学の知識が大切だと強く自覚している。
50%の学生がクリクラ中に基礎医学の知識を積極的に見直している。
44%の学生が基礎医学のレクチャーを受けたいと考えている。

教員アンケートから

基礎科目の復習講義について、22%が必要、62%があってもいいと回答した。
74%の教員が基礎医学・病態を考慮した指導を行っている。

テーマC 基礎医学の視点から

提言

1. **補講は希望者にもみ柔軟に対応**
学生によって、診療科によってニーズが異なるので
必ずしも補講全員受講を義務化せず柔軟に対応する
2. **学生の自主的な学びの姿勢を育む**
風通しの良い教員-学生間のコミュニケーション
FLBM: Flexible learning for basic medicine
(疑問があればいつでも自由に基礎講座に質問に来て)
3. **基礎-臨床ジョイントで学修サポート**
臨床実習の合間に基礎の対面講義を行うことや
e-learningによる学修サポートなどを基礎-臨床ジョイントで行う

D. 実効性のある方法の提案 D-1. オンライン実習

学生アンケートより

73%の学生が教員によるレクチャーは役に立った。
42%の学生がオンライン実習は必要だと思っている。

教員アンケートより

44%がオンライン実習を実施した。
9%の教員がオンライン実習は必要だと回答した。

テーマD-1 実効性のある方法の提案 オンライン実習の活用法

提言

1. 他(多)施設・職種を活かした協同学習による学生主導の教育や他(多)施設との抄談会やカンファレンス・カンサーボードへの参加
2. 教員と学生間での、予習ツールとしての教材・資料のオンデマンド配信、画像・病理・手術動画などの視覚的教材の共有

D. 実効性のある方法の提案 D-2. 協同学習

学生アンケートより

協同学習形式の指導が有用だと思っている学生は27%
77%の学生が傾聴やミラーリングが患者さんへの対応に役立った。

教員アンケートより

85%の教員が積極的に協同学習を取り入れるべき・取り入れてよいと回答した。
11%の教員は協同学習によるクリクラの変化を感じているが、20%は変化を否定し、69%は分からないと回答した。

テーマD-2 実効性のある方法の提案 協同学習を応用した実習法

提言

学習方式を広げるための伝え方の工夫とその機会

1. 臨床実習前オリエンテーションの際に、協同学習のようなアクティブラーニングでは、一方的な講義形式にくらべて記憶の定着率が高いことなどを具体的に提示すること
2. 国家試験のためだけでなく、その後の臨床研修においても協同学習が活用できることを提示すること

協同学習の評価

1. 実習前後で学生が自己評価を行う
2. プレゼンテーションにおけるベストプレゼンターを相互選出する

持続可能な学習法として、協同学習を各診療科や久留米大学病院に定着させるために、小人数ごとに話し合いができるサロンの確保。

D. 実効性のある方法の提案 D-3. 新しい手法

本項に関するアンケート 要約

【学生】

- クリクラに満足しているのは42%
- 90%の学生がStudent Dr.のプライドを持ってクリクラに臨んでいる。
- 87%の学生がクリクラでstudent Dr.として成長できたと考えている。
- 63%の学生がクリクラ実習時間内で**国試卒試の勉強がしたい**。
- 88%の学生は実習時間中に**自由な学習時間**（1～2時間；30%、2～4時間；39%）が欲しい。

【教員】

- 学生に実習時間内に自由な学習時間を、15%は絶対必要、52%はある程度必要と回答した（1～2時間；64%、2～4時間；32%）。

テーマD-3 実効性のある方法の提案 新しい手法の可能性

提言

マクロな視点での実践

協同学習の発展型・リカレント型教育の徹底

1. 終了したグループが次のグループを教える
2. 疾患ベース(関連診療科合同)のカンファレンス
3. 他の大学との合同カンファレンスでの発表(教育の標準化・相対化)
4. IoT(VR)を活用した学習

ミクロな視点での実践

学生カルテ

成績、苦手な知識・技能、毎日患者さんと話しているかなど日常診療の実践
CC-EPOC
診療科に引き継ぎながら、個人レベルのオーダーメイドの指導につなげる。

E. クリクラ評価

教員アンケートより

教員の25%は成績評価が適切ではない、49%がわからないと回答した。

テーマE クリクラ評価の方法

提言

1. 形成的な評価をクリクラ評価の基本とする。
2. 「SHOWS HOW」(どう使うかが分かっている使える)と「DOES」(必要なときに使える)を含めた評価を行う。
3. 4学年には態度・技能を重点的に評価する。
4. 知識の評価は総合試験で行うため、4・5年における知識の評価は全体の10%程とする。
5. 5・6学年には態度・技能に加えて低学年への指導を評価する。
6. 全員(学生同士・パラメディック・患者さんを含む)による評価を実施する。



参加者からの投票の結果、D-3 グループが最優秀グループとして表彰されました。

● 閉会あいさつ 医学部長・教務委員長・実行委員長



矢野先生、安陪先生、井川先生から閉会の挨拶を頂いた後、集合写真を撮影し終了しました。参加された学生さん・先生方、一日お疲れ様でした。

<学生さんに記載してもらいましたアンケートの紹介>

1. 医学教育ワークショップに参加して、教員に対する認識は変わりましたか？もし、変わったなら、どのように変わったか、教えてください。

・学生だけが大変なのではなく、先生方も試行錯誤しながら、悩みながら教育にあたられていることを知りました。

・学生に対して非常に熱い気持ちや愛情を持って、教育に臨んで下さっている先生が多いことに驚きを覚えました。

・久留米大学の多くの先生方が学生教育に対して熱意を持ってくださっていることを実感することができ、嬉しかったです。また、直接先生方とディスカッションする機会も多くあったことから、先生方との距離が少し縮まったように感じました。

2. 今後選んでほしいテーマがあれば教えてください。

・基礎医学～臨床医学の一貫した教育実践法、基礎医学教育と臨床医学教育の融合。

・教員と学生の距離を縮めるにはどうする

べきか。

・低～中学年の系統講義で学んだ知識を如何にして将来に生きる知識として定着させるか。

・協同学習に関して

・6年次の実習に関して

3. 医学教育ワークショップに参加した感想を教えてください。

・まず、先生方と意見交換できたことは私にとっても貴重な経験になりましたし、先生方の熱い思いも知り、今後の勉強のモチベーションに繋がりました。教育する側、受ける側のそれぞれの改善点が明確になったことはとても良かったと思います。私自身はクリクラを終えてしまいましたが、様々な新しいアイデアが出ていたので、今後、後輩達が受ける実習がより良いものになることを期待しています。学生にとって先生方と直接意見を交わす機会はなかなかないので、後輩たちにはぜひ勇気を出して沢山参加して欲しいです。

・学生も、先生たちの期待に応えるべく日々の自己学習、実習に励んでいかなければならないと改めて感じました。学生の意見を直接先生方に聞いていただく機会はなかなかないので、多くの学生にワークショップに参加してもらって、講義や実習など、今後より充実したものにしてほしいと思います。

・臨床実習に関して、一日を通じて先生方と議論する機会を得ることが出来、とてもよ

かったです。できればもっと多くの学生が参加をし、各サブテーマに割り振られる形となればより良かったのではないかと思います。次回の開催時はテスト直前などを避けるような日程で調節して頂けるとより多くの学生の参加が望めるのではないかと思います。今回、先生方の教育への情熱を深く知ることが出来、私も将来教職員となり、学生教育の機会に携わる機会が出来たら、是非積極的に関わっていきたいと思いました。

編集後記

今回は8月に開催されました医学教育ワークショップを特集として取り上げました。学生の皆さんも試験前の忙しい中、参加してくれました。学生アンケートの一部を掲載していますが、学生の皆さんにも好評だったようです。今後、後輩の皆さんにもぜひ参加してほしいという声もありました。教育に対する要望を反映させるいい機会と思われまますので、次回の医学教育ワークショ

ップにも学生さんの参加を期待しています。

医学教育ニュースは、久留米大学医学部医学科のホームページ、Hondana、Google スペースにてご覧頂けます。皆様の様々なご意見などを教務委員会まで頂けると幸いです。

最後になりますが、今回、医学教育ワークショップに参加されたすべての学生さんと先生方にこの場を借りて感謝申し上げます。

編集責任者 秋葉 純／病院病理部 教授